

投稿

「天文教育」誌の今と昔【2】

～特集と連載について～

松村雅文（編集委員会）

1. はじめに

当会の定期刊行物である「天文教育」誌は、20年以上の歴史を持ちます。これまで「天文教育」誌の内容はどのようなものであったのか、メンバーにとってどのような存在であったのか、また、今後はどのようなことを目指せばよいのか等を考えてみたいと思いました。そこで先月号では、名称・表紙・ページ数の変遷を調べました[1]。この結果、ページ数は、年とともに増加する傾向があること（[1]の図5）や、会員数の変化との相関はないこと（[1]の図6）等が判り、会員のみなさんや歴代の編集委員が、いかに努力して会誌を発展させてきたかが判ってきました。

今回は、特集と連載に焦点をあて、その内容を検討します。ページ数は、2000年頃から、急速に増加していますが、その理由は、充実した特集が組まれていたことによります（[1]の3.2節）。つまり特集は本誌の充実に重要です。また、幾つもの号にわたる連載についても、あわせて見ていくことにしました。

2. 特集について

「天文教育」誌のホームページ[2]には、創刊以来の各号の目次があります。それによると、特集が最初に表れたのは、1995年9月号であり、“特集：資料集「理科離れ対策の現状」”と記され、4本の記事が掲載されていることがわかります。資料集と書かれているのは、資料として参考にしてほしいとの意図があったからでしょうか。この頃は、ゆとり教育が重視される少し前で、詰め込み教育による理科離れが懸念されていた頃になります。

表1 「天文教育」誌上の特集の一覧

	年 月	特集のタイトル	記事
1	1995 9	資料集「理科離れ対策の現状」	4
2	1996 3	資料集「学ばせたい天文の学習項目」	1
3	1998 9	しし座流星群	5
4	1998 9	観望用天体望遠鏡の開発	7
5	1998 11	科学史を天文教育に生かす	4
6	1999 5	新学習指導要領による天文教育	5
7	1999 7	日本の博物館・科学館の天文展示	4
8	1999 9	公開天文台	3
9	1999 11	太陽観測	4
10	2000 1	星座の文化史	8
11	2000 3	学校における天文教育の実践	4
12	2000 5	天文施設における体験学習	7
13	2000 7	ハンズオン天文学	9
14	2000 9	月と遊ぶ	5
15	2000 11	暦	4
16	2001 1	20世紀の天文十大ニュース	12
17	2001 3	日周運動を考える	4
18	2001 5	火星を楽しもう	5
19	2001 7	天文史跡めぐりへの招待	4
20	2001 11	宇宙を学べる大学・天文学者のいる大学(2001年版)	1
21	2002 3	パブリックアウトリーチ<1>	8
22	2002 5	パブリックアウトリーチ<2>	5
23	2002 7	高校生ネットワーク	8
24	2002 9	国際天文学連合IAU第8回アジア太平洋地域大会	10
25	2003 3	『すばる』や『ハッブル』を使いこなせ！（関東支部報告から）	5
26	2003 5	『すばる』や『ハッブル』を使いこなせ！（関東支部報告から）	6
27	2003 7	研修会「プラネタリウムの役割と使命を考える」報告	4
28	2003 7	火星大接近	4
29	2004 3	昼間でもできる天文教育普及	6
30	2004 9	社会と天文学の架け橋	7
31	2004 11	超新星	7

(表1 続き)

32	2005 11	宇宙を学べる大学・天文学者のいる大学	1
33	2007 3	追悼磯部瑠三さん	6
34	2007 9	ユニバーサルデザイン天文教育その1	7
35	2007 11	ユニバーサルデザイン天文教育その2	6
36	2009 1	世界天文年	4
37	2009 3	世界天文年	3
38	2009 5	2009日食	4
39	2009 9	日食見てきた記	10
40	2009 9	世界天文年 全国同時七夕講演会の報告	6
41	2009 11	宇宙を学べる大学・天文学者のいる大学 ~2009年版~	1
42	2010 3	世界天文年2	8
43	2010 5	地域とともにあゆむ天文教育・普及 ~年会に向けて~	5
44	2012 1	2011年度近畿支部会報告	14
45	2012 1	関東支部会報告	3
46	2012 3	2012年5月金環日食に向けて	11
47	2012 7	速報・2012年金環日食	10
48	2012 9	2012年金環日食・続報	8

創立以来から2012年11号までの「天文教育」誌に掲載された特集を、[2]を参考にして、表1にまとめてみました。1995年から今まで48の特集が組まれており、平均すると、1年あたりの平均は約4です。しかし、変動は大きく、特に2000年や2001年、ページ数が急増した時期や、2009年の世界天文年の年に、特集の数も多いことがわかります。

では、特集のテーマは、どのように特徴づけることが出来るのでしょうか。表1を一見すればお判りの通り、テーマは、非常に多岐にわたっています。当会が色々なバックグラウンドをもった人たちから構成されているので、当然の結果かもしれません。

特集のテーマが多様であることを確認しただけでは面白くないので、少しじっくりと分類を試み、表2を作成しました。この分類はかなり私の主観が入っていると思われ、別の方が分類すると別の結果になりそうです。そ

れでも、しし座流星群や日食など、イベント的な天文現象を扱った特集が多いことがわかります。特集は、ある特定の号に複数の記事を載せるので、タイミングが重要であるイベント的な現象とは相性がよいと考えられます。次に多いのが、支部会・年会関係、学校関係、科学館や公共天文台、科学史、世界天文年、大学に関するものとなっています。

個性的な特集の中でも、「月と遊ぶ」(表1のNo.14, 2000年9月)[3]や「日周運動を考える」(No.17, 2001年3月)[4]、社会と天文学の架け橋(No.30, 2004年9月)[5]などは、当会らしい切り口の特集のように思われます。将来の参考になるかもしれません。

表2 特集の分類

分類	番号(表1の第1コラム)
イベント的な天文現象	3 18 28 (31) 38 39 46 47 48
支部会・年会	25 26 30 43 44 45
学校関係	1 2 6 11 23
科学館・公共天文台	7 8 12 27
科学史	5 10 (15) 19
世界天文年関連報告	36 37 40 42
大学	20 32 41
日常の天文現象	9 17
その他	4(望遠鏡) 13(教材) 14(月) 16(ニュース) 21 & 22(パブリックアウトリーチ) 24(国際学会報告) 29(昼の天文) 30(社会と天文) 33(追悼磯部氏) 34 & 35(ユニバーサルデザイン)

3. 連載について

特集と同様に、連載についても「天文教育」誌のホームページ[2]を参照して、まとめてみました(表3)。過去には、「リレー連載」と呼ばれ、複数の著者が書いていた場合もありましたが、ここではその区別はしていません。

特集と同様、連載においても、様々なテーマが取り上げられています。

連載についても、私なりの分類を行ってみました(表4)。比較的多いのが、天文学史に関するものです。次は、天文現象や研究の最前線などの解説記事です。これらは、まとめて解説と分類しても良いのかもしれませんが。連載でも、その時々課題に応じて、学習指導要領(表3のNo.14、21)があったり、社会教育施設の指定管理者制度の導入の問題(No.30)が取り上げられたりしています。

表3 「天文教育」誌上の連載の一覧

	年 月	連載のタイトル	記事
1	1998 9 1999 3	カナダ王立天文学会の歴史と現状 (重久長生)	3
2	1998 11 2001 7	教育養成系大学の天文研究室	17
3	2000 1 2001 1	ちょっとだけ宇宙 CG エクセルで描く「...」	7
4	2001 9 2004 7	天文学最前線	13
5	2001 9 2002 7	隣のブラックホール (福江 純)	8
6	2001 9 2003 11	星クラブ	14
7	2001 9 2002 1	星ミシュラン	3
8	2001 9 2002 3	天文コミック「身のまわりの宇宙」(坂元 誠)	4
9	2001 11 2003 1	「こんな活動やっています」	4
10	2001 11 2002 7	今月のグラフィックス	5
11	2001 11 2002 5	今月のラボ	4
12	2001 9 2002 7	過去に観る天文学と教育 (株本訓久)	6
13	2001 11 2002 9	人類を揺るがした天文現象	7
14	2002 1 2002 11	新指導要領ここが知りたい/いよいよはじまる新学習指導要領	6
15	2002 5 2006 5	宇宙を学べる大学	17
16	2002 5 2003 5	今月のプログラム	7

(表3 続き)

17	2002 7 2003 7	星と☆形	5
18	2002 11 2005 1	シネマ天文学 (福江 純)	12
19	2003 3 2004 9	天文学への道	7
20	2004 5 2005 7	うちの卒論	9
21	2004 5 2005 5	天文教育スタンダード	7
22	2004 7 2006 7	こんな授業やっています	6
23	2004 9 2005 9	天文教材ちょっと工夫	6
24	2005 1 2005 11	相対論百年	6
25	2005 3 2005 7	ブラックホールの質量 (福江 純)	3
26	2005 5 2006 1	PC天文教材	3
27	2005 9 2006 3	天文教材・古今東西	2
28	2006 1 2006 11	宇宙ギネスシリーズ	6
29	2006 5 2006 11	思い出の星空	3
30	2006 9 2008 5	社会教育施設が変わる!?	8
31	2007 1 2007 11	星々の終末の姿	6
32	2007 3 2011 3	最新宇宙誌	19
33	2007 5 2010 9	江戸時代の天文学	14
34	2008 1 2008 11	望遠鏡400年	6
35	2008 9 2009 5	「天プラ」の挑戦	5
36	2009 1 2012 9	恒星天文学の源流 (小暮智一)	23
37	2009 7 2010 3	動画を用いた天文教育普及	4
38	2010 1 2010 11	天文ソフトの活用	7
39	2011 1 2012 3	小惑星探査機「はやぶさ」の感動から天文教育へ	6
40	2011 5 ~	天文教育普及研究会の歴史 (水野孝雄)	5+
41	2011 7 2012 1	天文学史教材としての天体観測機器3DCG 復元	4
42	2011 7 ~	宇宙を観る生活を!	9+

一方で、特集と比べると、連載は、こだわりが感じられるテーマを扱う場合が多いように思われます。例えば、「星ミシュラン」(表3のNo. 7)は、利用者の立場から、社会教育施設の星の数を評価しようというもので、第1回(2001年9月)は、西はりま天文台の家族ログが取り上げられていました。

表4 連載の分類

分類	番号(表3の第1コラム)
天文学史	1 12 13 17 33 34 36 40 41
天文現象・研究等の解説	4 5 24 25 28 31 32 34
パソコン・ソフト関係	3 10 16 26 37 38
大学・研究室等紹介	2 15 19 20
天文教材	11 23 27
学習指導要領・授業	14 21 22
その他	6(クラブ) 7(天文施設) 8(コミック) 9(活動) 18(シネマ) 29(思い出) 30(社会教育) 35(天プラ) 39(はやぶさ) 42(宇宙を観じる)

4. 最後に

今回は、特集と連載について見てきました。色々と個性的な特集や連載が多いことが判りましたが、年会に向けての問題提起の特集(表1のNo.43, 2010年5月)や、支部会の報告(同No. 25, 26, 44, 45)も目につきました。会の活動の内容を、どのように会誌に反映させれば良いのか、そこにも会誌充実への鍵がありそうです。

文献等

- [1] 松村雅文(2012)「天文教育」2012年11月号 vol.24, p.12

- [2] 当会「天文教育」誌のホームページ <http://tenkyo.net/kaiho.html>

- [3] 「天文教育」2000年9月号の特集「月と遊ぶ」の4記事は、次の通り：

「素朴な疑問 Q&A」(浅田英夫)、「観望会のと看に便利：月の欠けぎわがわかる早見の製作」(浅田英夫)、「ついたちについて」(服部完治)、「月をめぐる、小学校の学習事例」(寺林民子)。

- [4] 「天文教育」2001年3月号の特集「日周運動を考える」の4記事は、次の通り：

「日周運動のシミュレーション」(江崎美由紀)、「プラネタリウムで日周運動をどう教えるか」(中田美智世)、「全天モニターカメラのアーカイブデータの教育利用」(尾久土正巳)、「星の動き(日周運動)の動画撮影」(小澤友彦)。

- [5] 「天文教育」2001年9月号の特集「社会と天文学の架け橋」の7記事は、次の通り：

「特集にあたって」(有本淳一)、「新聞は、なぜ天文を発信するのか？」(尾関章)、「書籍を通じたアプローチ」(成田直)、「文系高校生に見る天文学・地質学への興味」(寺戸真)、「幸せな結末」(谷川智康)、「山本一清と中村要の天文普及活動」(富田良雄)、「社会との関わりから広がる掩蔽観測」(下代博之)

松村 雅文